特集

この冬始める洋書習慣
プロ激オシの名作5選

晩秋、寒さが厳しくなり、外に出るのがおっくうになる季節。
これからやってくる冬は、暖かい家で何をしよう？
今回はそんな迷えるあなたに挑戦してほしい、
洋書リーディング特集。
さまざまな経歴の経験豊かな洋書の「プロ」たちが
今年の冬に読んでほしい珠玉の1冊をそれぞれ紹介する。
「洋書は難しそう……」と思った方でも
プロの解説で、必要な事前知識や
作品の雰囲気が丸わかり。
読み方のアドバイスも必見だ。
この冬は、洋書リーディングに挑戦し、
新たな傑作と出合おう。

編集：菊池豪人

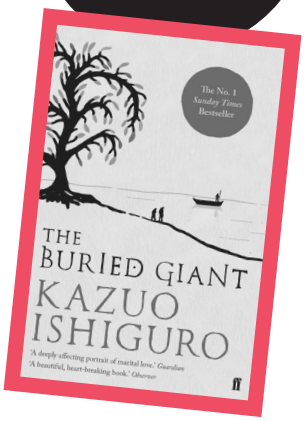
pp.40-42　青谷優子氏（英語朗読家）
pp.43-45　伊藤晶子氏（日本多読学会会員）
pp.46-48　金原瑞人氏（翻訳家）
pp.49-51　辰巳JUNK氏（ライター）
pp.52-54　宮脇孝雄氏（翻訳家）

Evgeny Karandaev / Shutterstock.com（p.39）・Ekkapop Sittiwantana / Shutterstock.com（p.41）・alessia_penny90 / Shutterstock.com（p.42）・Sarah Marchant / Shutterstock.com（p.44）・Fertas / Shutterstock.com（p.45）・Ensuper / Shutterstock.com（p.46）・artyway / Shutterstock.com（p.48）・SvedOliver / Shutterstock.com（p.48）・AFM Visuals / Shutterstock.com（p.51）・Morphart Creation / Shutterstock.com（p.52）・Morphart Creation / Shutterstock.com（p.54）

The Buried Giant

Kazuo Ishiguro

1 青谷優子氏のオススメ



まずはノーベル賞受賞作家、カズオ・イシグロの作品だ。
紹介してくれるのは元NHKワールドのニュースアンカーで、英語朗読家の青谷優子氏。
本書の舞台は6世紀頃の英国。主人公の老夫婦は、「霧」により失われた記憶と、
居場所のわからない息子を探す旅に出る。
不思議な世界観から読み解く哲学的なテーマとは。

人は忘れることで幸せになれるのだろうか?

本作の舞台は、騎士道物語で有名なアーサー王より後の時代のブリテン島（英国）です。サクソン人とブリトン人との激しい戦いも終わり、人々は平和に暮らしていましたが、不思議な「霧」のせいで些細なことから大切なことまでいろいろな出来事が思い出せません。主人公のAxlとBeatriceの老夫婦もその例に漏れず、2人は行方不明の息子と失われた記憶を取り戻すため、旅に出ます。

この小説は（カズオ・イシグロの小説の多くがそうであるように）「記憶」と「思い出」が鍵となっています。読者は物語を通じて「忘れることはいいことなのか？ 記憶とはどの程度必要なのか」について深く考えさせられます。根底にあるのは哲学的なテーマですが、基本は老夫婦のロードストーリーです。夫婦がさまざまな登場人物と出会い、時にOgreやPixieといった妖怪や物の怪を退治しながら「記憶」を取り戻そうとする冒険小説的な御伽噺です。6世紀頃の英国が舞台なので会話部分はやや古めかしい独特な英語で書かれていますが、慣れると時代小説を読む感覚で楽しむことができます。英語そのものはさほど難しくありません。叙情的で美しい文体で書かれているので丁寧に読むとその時代にタイムスリップしたような感覚に陥ります。

ファンタジーという世界が一部の方には受け入れられないという意見もありますが（実は私もあまり得意なジャンルではないです）、この作品は人間の心に重きを置いて描かれているので気になりませんでした。むしろファンタジー的な世界を設定することで深いテーマを重くなりすぎることなく描くことができ、読者もぐいぐい引き込まれ、また同時に深く考えるという不思議な体験ができるのでしょう。

心に響いた文章はたくさんありますが、特に以下が印象的でした。

夫との愛を信じて疑わないBeatriceが2人の思い出をなんとしてでも取り戻したいと主張するシーン。

"Axl and I wish to have again the happy moments we shared together. To be robbed of them is as if a thief came in the night and took what's most precious from us."

そして争いで大切な人を失った少年Edwinが、「救出には遅すぎたとしても、復讐には間に合う」と決意を新たにするシーンです。

And he remembered something the warrior had said: that when it was too late for rescue, it was still early enough for revenge.

愛情と憎しみは表裏一体なのかもしれないということに、はっとすると同時にぞっとさせられました。